仕事人秘録

未来の予感を形に ⑫

工業デザイナー
川崎 和男氏

アップルとの縁 20年近く

人工心臓など先端分野のデザインに挑むことができたのは、パソコン黎明（れいめい）期の1980年代からコンピューターを積極的に導入してきた結果だった。

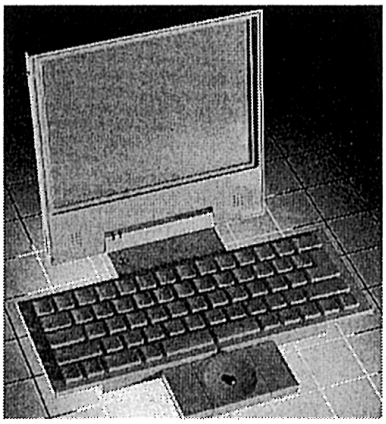
84年、アップルの初期パソコン「マッキントッシュ128K」が発売された時は、これからのデザインのツールになると直感した。いまやデザイン業界だけでなくアートの世界でもマックは必需品となっているが、私は比較的早い時期から自分の仕事に取り入れることができた。

福井市を拠点に活動していた80年代、高校時代の友人が事務機器販売会社の社長をしていた縁でワープロをマスターしていた。東京でさえパソコンの最新知識を持つ人が少ない時代。私は集められるだけのパソコン関連書籍・雑誌を読み、プログラム言語の構造などを独学した。

当時はコンピューターを使う工業デザイナーは私以外にほとんどいなかった。今でも建築家の一部には残っているが、手書きの図面を神聖視する風潮があった。私はデザイン界をコンピューターで改革しなければならないと、使命感を持ち始めた。私の初出版もパソコンのCADの解説書で、いつの間にかパソコンそのもののあり方にも発言できるほどになっていた。

91年から1年半ほどアップルのデザインコンサルタントを引き受けた。

アップル本社で技術者やデザイン担当者に私の構想を語った。当時会長だったジョン・スカリー氏に呼ばれ「アラン・ケイにも君のプレゼンテーションを見せてくれ」と言う。「パソコンの父」と尊敬される科学者にコンピューターのデザインを説明する。これは私にとって夢のような出来事だった。



コンパクトで操作性の高いデザインを提案した

アップルとのコンサルタント契約はスカリー氏の退任と同時に解消されたが、その後も同社の関係者との交流は続いている。東京・銀座のアップルストアでデザインをテーマに講演することもある。

アップルの組織と製品を見ていると、日本にはないデザイナー中心主義が感じられる。日本企業の多くが陥りがちな「コンセプトありき」という姿勢がない。だから無意味な会議を開かない。デザイナーのアイデアを重視して製品を作り始めてから、最高経営責任者（CEO）のスティーブ・ジョブズ氏らトップがコンセプトを考え、後付けする。デザイン拠点には毎週のようにトップが訪れる。

このような姿勢がアップル製品の強さの源泉ではないか。日本の経営者の多くは、デザイナーの発想をきちんと受け止められる美学観を持っていない。経営者がもうけることしか考えていないと、製品デザインは厚みを失ってしまう。

2010年11月30日　日経産業新聞　27面　日本経済新聞社　＜仕事人秘録＞　未来の予感を形に